

Thematic Exhibition
Re-creating National Treasures:
Tanaka Shinbi and Reproductions

Wednesday, October 15—Sunday, December 7, 2014

Thematic Exhibition Room, Heiseikan,
Tokyo National Museum

2014年10月15日(水)～12月7日(日)
東京国立博物館 平成館企画展示室

田中親美(一八七五～一九七五)は、生涯にわたって数々の国宝の模写・模造を制作しました。「平家納経(模本)」は、原本を所蔵する広島 厳島神社の依頼で、大正時代の財界人や数寄者が援助して制作されたものです。東京国立博物館(以下、当館)が所蔵する三十三巻一組(経箱を含む)は、その一環で作られました。それは、絵や書を写すだけでなく、絢爛豪華な装飾料紙や、繊細な金具まで、徹底的に再現されています。

当館では、明治五年(一八七二)の創立当時より模本の収集や制作を行なってきました。田中親美の模本とともに、博物館初期の模写活動の一端を紹介します。

Tanaka Shinbi (1875–1975) made reproductions of many National Treasures throughout his lifetime. The *Heike Nokyo Sutras (copy)*, which is a set of 33 volumes with a box, was made by commission from the Itsukushima Shrine, the owner of the original Heike Nokyo sutras. It was a part of replication projects which was supported by entrepreneurs and art enthusiasts.

Tokyo National Museum has collected and produced replicas of important works since its founding in 1872. This exhibition introduces the reproduction works by Tanaka Shinbi and the activities of the museum in its early days.



赤人集

本願寺本三十六人家集 (模本)

Anthology of Thirty-six Poets, Hongwanji version (Copy)

田中親美模 大正～昭和時代・20世紀 彩箋墨書 全十一帖のうち 縦21.1cm、横6.4cm B-2798
原本：国宝 平安時代・12世紀 京都・西本願寺蔵

特集

国宝再現

田中親美と模写の世界



平家納経 (模本) 厳王品

原本は、明治二十九年(一八九六)に本願寺で古書の調査を行なっていた大口周魚(鯛二、一八六四～一九二〇)によって発見されたことが知られている。発見後に周魚は、東京の自宅に数冊ずつ借り出していた。この間に田中親美は、周魚宅に通って模写をする。舶載(中国製)の唐紙や、日本製の唐紙を、切り継ぎや破り継ぎなどし、さらに金銀箔、金銀泥の装飾を施した装飾料紙の頂点とも言える作品である。親美は本作を模写する際に、本格的に料紙の再現に取り組むようになったのである。

田中親美の模写

本願寺本三十六人家集 (模本)

蛭川式胤(一八三五～八二)は、当館の創立に関わった一人で、幕末より独自に宝物調査を行なっており、創立時に約四十件の模本を寄贈した。本作には、式胤の字で、式胤が所蔵する模本を遠藤貫周が再模したことが書き込まれている。原本は国宝で、東山御物だったとされる作品。男装の女官を描いているが、原本と本作は逆を向いている。また、腰に付けた横笛の位置が、原本は手前だが、本作は奥になっている。なぜ逆向きなのかは謎だが、式胤の書き込みはその服装についても考察しており、服装の勉強のために写したと推測される。

*東山御物・足利義政(一四三六～九〇)の所蔵を中心とした室町將軍家の宝物のこと。

宮女図 (模本)

東京国立博物館創立時・蛭川式胤による寄贈



宮女図 (模本)
Female Servant at Imperial Court (Copy)
遠藤貫周模 明治時代・19世紀 紙本着色 一幅
縦109.7cm、横56.9cm A-9166 蛭川式胤寄贈
原本：国宝 元時代・13世紀 絹本着色 個人蔵



孔雀明王像 (模本)(部分)
Mahamayuri (Kujaku Myo'o) (Copy)
横山大観模 明治時代・19世紀 絹本着色 一幅 縦96.9cm、横59.3cm A-6818
原本：重要文化財 鎌倉時代・13世紀 絹本着色 京都・安楽寿院蔵

特集 国宝再現—田中親美と模写の世界—

平成26年10月15日発行

執筆：恵美千鶴子(東京国立博物館客員研究員)／編集・翻訳：東京国立博物館出版企画室
デザイン・制作：D_CODE／発行：東京国立博物館 ©2014 東京国立博物館

東京国立博物館所蔵の模写



普賢十羅刹女像 (模本)
Samantabhadra with Ten Raksasis (Copy)
田中親美模 大正時代・20世紀 紙本着色 一幅
縦73.1cm 横40.0cm 個人蔵
原本：重要文化財 鎌倉時代・13世紀 絹本着色 個人蔵

普賢十羅刹女像 (模本)

十二単衣姿の十羅刹女は、「平家納経」の「観普賢经」や、「扇面法華经册子」(国宝、大阪・四天王寺／東京国立博物館蔵)にも見られる。田中親美は、「平家納経(模本)」の制作の前に本作を模写していた。原本は冷泉為恭(一八二三～六四)旧蔵で、為恭自身もこれを模写した。為恭は、親美の父・有美にとって師でもあり従兄でもある。親美は為恭による模本を所蔵しており、「画人の多くは絵事に専らにして書法を学ばず。為恭の如く書画ともに優秀なるものは稀なり。此幅の如きは遺作中殊に入神の作なり」と述べている。親美の書画に対する精神が込められたような言葉である。

原本が益田鈍翁に渡った際に親美は本作を模写するが、なにかと縁の深い作品であり、親美も「愛着を抱いた」という。

*所蔵先の記載がない作品は当館所蔵

謝辞：展示およびフリーフレット制作につきまして、田中親美氏御遺族より多大なるご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。
付記：本特集は、学術振興会科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)・基盤研究(C)「模写資料における書の受容・鑑賞に関する基礎的研究」(課題番号：25370149、代表者：恵美千鶴子)の研究成果を踏まえ実施した。



平家納経（模本）



提婆品



平家納経（模本）

Lotus Sutra Donated by Heike Clan (Heike Nokyo) (Copy)
田中親美模 大正～昭和時代・20世紀 彩箋着色、墨書・彩字 全三十三巻・経箱一合 縦 25.5～28.0cm、全長 95.6～863.2cm B-2406
原本：国宝 平安時代・長寛2年（1164） 広島・嚴島神社蔵



嚴王品（部分）



葉草喻品（部分）



「嚴王品 見返し（模本）」を掛け軸に装丁したもの（個人蔵）。

大正九年（一九二〇）、原本の保存状態を心配した嚴島神社宮司の依頼を受けて、高橋常庵（義雄、一八六一～一九三七）と益田鈍翁（孝、一八四八～一九三八）は、「平家納経」の模本制作の資金を集めた。制作を任された田中親美は、約五年かけて完成させる。

その間に起こった大正十二年（一九二三）の関東大震災では、親美は、自宅に預かっていた「平家納経」の原本を、抱きしめて護ったという。

田家に納められた。当館が所蔵する模本は、益田鈍翁旧蔵の一組である。親美はさらに、「平家納経」の中から「嚴王品」などを単巻でいくつか模写したようで、当館も松永耳庵（安左工門、一八七五～一九七二）より「嚴王品」模本一巻の寄贈を受けている。

久能寺経（模本）



「久能寺経」の模本制作は、原本十九巻（内二巻は補写）を所蔵する静岡・鉄舟寺より依頼があった。「久能寺経」は、江戸時代にはすでに散佚した巻があり、そのうちの数巻が明治時代に売りに出されて、益田鈍翁ほか田中親美と親しい数寄者が所蔵していた。「平家納経」と並び称される装飾経の代表作であるため、親美は喜んで制作を引き受けた。奥書には、父・親美と、「子息重」の名前が見える。「久能寺経（模本）」の制作は、父と子の協同作業だったのだ。

「久能寺経」は界線に截金を用いる場合がほとんどである。親美は、神奈川・称名寺の弥勒菩薩像の胎内で見つかった針と篠竹をもとに、截金を早く美しく施す方法を編み出し、活用したという。

*截金・金箔や銀箔を、細い線状や三角・四角などに切つて貼り付ける技法。



葉草喻品

久能寺経（模本）

Lotus Sutra, Kunoji Temple version (Copy)
田中親美模 昭和26年（1951） 彩箋着色、墨書 二巻
【葉草喻品】縦 25.8cm、全長 273.3cm
【随喜功德品】縦 27.0cm、全長 195.5cm 個人蔵
原本：重要文化財 平安時代・12世紀 個人蔵
静岡・鉄舟寺所蔵の十九巻は国宝



田中親美 【田中親美】（展転社、1985）より転載

田中親美（本名 茂太郎）は、父・田中有美（茂一、1840～1933）より絵を学び、和様の書の大家・多田親愛（1840～1905）から書を学んだ。親愛からは写すことの大切さを教わったため、若い頃から模写をしはじめ、生涯にわたって名品の模写・模造を行なった。また、益田鈍翁ら数寄者とは茶の湯を通して交流し、親美は古筆に関する意見を求められるような存在だった。



随喜功德品（奥書部分）